

箴言におけるツエデク／ツエダカー／ツァディーク

－新共同訳訳語の批判的検討(下)－

小林 洋一

(上)の内容¹

序

- I 箴言におけるツエデク／ツエダカー／ツァディークの訳語の比較
 - A 箴言におけるツエデク（9回）の訳語の比較
 - B 箴言におけるツエダカー（18回）の訳語の比較
 - C 箴言におけるツァディーク（66回）の訳語の比較
- II 箴言におけるツエデク／ツエダカー／ツァディークの用語法と語義の分析
 - A 箴言におけるツエデク用語法と語義
 - 1 知恵（1：3，2：9，8：8）
 - 2 政治（8：15，16＝裁判と共通，16：13，25：5）
 - 3 裁判（12：17，31：9）
 - B 箴言におけるツエダカー用語法と語義
 - 1 知恵（8：18，20）
 - 2 政治（14：34，16：12）
 - 3 経済（10：2＝命と死，11：4＝命と死，11：18，16：8）
 - 4 命と死（11：19，12：28，16：31，21：21，11：5，11：6，13：6）
 - 5 ヤハウエ（15：9，21：3）
 - C 箴言におけるツエデクとツエダカー用語法と語義の異同について
（続）

以下は（上）の続きである。

¹ 「箴言におけるツエデク／ツエダカー／ツァディーク－新共同訳訳語の批判的検討－(上)」は『西南学院大学神学論集』62巻第1号（2005.3），1-36に所収。

D 箴言におけるツァディークの用語法と語義

ヘブライ語辞典 BDB は形容詞としてのツァディークの基本的意味として、just, righteous を挙げ、形容詞と名詞の両方の用法を挙げている²。ツァディークには単数形と複数形があり、箴言では両方が現れる。この語は箴言の中心部分である10-29章に多く現れ、特に、10-15章にラーシャーとの対比で集中的に現れる。それ以外では1-9章に部分的に現れるに過ぎない(4回)。後代の付加部分と考えられる30-31章には現れない。

ツァディークとラーシャー

箴言において、ツァディークは66回現れるが、その内の43回がラーシャーとの対比あるいは対極化であり、その用例が一番多い(2:20; 3:33; 10:3, 6-7, 11, 16, 20, 24-25, 28, 30, 32; 11:8, 10, 23, 28, 31; 12:5, 7, 10, 12, 21, 26; 13:5, 9, 25; 14:19, 32; 15:6, 28-29; 17:15, 26; 18:5; 21:12; 24:15-16, 24; 25:26; 28:1, 12, 28; 29:2, 7, 16, 27)。

ツァディークの意味として、just, righteous を挙げる BDB は、ラーシャーの意味として、wicked, criminal を挙げている³。ラーシャーは悪に対する一般的な言葉であり、共同体の福祉にとって脅威・有害なものを指す⁴。

C・ヴェスターマンは、ツァディークとラーシャーの対比には、知者と愚者の比較に見られるような愚者に対する寛容さとユーモアがなく、格言の構成が論理的・抽象的・教訓的となり、現実世界との接触を失って道德化し⁵、その対比が全てのものを包括する絶対的対比となっていると指摘する⁶。

2 Francis Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament with an Appendix Containing the Biblical Aramaic* (Oxford: Clarendon Press, no date), 843. BDB は上記ヘブライ語辞典の略語。

3 BDB, 957.

4 Cf. Duanef Watson, "EVIL," in *The Anchor Bible Dictionary II* (New York: Doubleday, 1999), 678-79.

5 Claus Westermann (tr.J. D. Charles), *Roots of Wisdom: The Oldest Proverbs of Israel and Other Peoples* (Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press, 1993), 67.

6 *Ibid.*, 84.

ツァディークとラーシャーの対比の格言には、何をもって人をツァディークとするのか、あるいは何をもって人をしてラーシャーにするのかの定義がない。また、あなた(がた)はツァディークでありなさい、と、あからさまに訓戒もされていない。ただツァディークとラーシャーには、それぞれにふさわしい結果が期待されていることが繰り返し取り上げられる。即ち、ラーシャーは、ツァディークの対極にあるものとして滅びが運命づけられている⁷。この滅びが神の裁きだとは明言されておらず、一つの秩序に即しての自滅のように描かれている。もちろん知者はヤハウエの信仰者であるので、この秩序も神から独立していると考えていたわけではないことは言うまでもない⁸。ともあれ、ツァディークの同定化は、ツァディークそのものを見つめているだけでは明らかとはならない。ラーシャーとの対比によってこそより明らかとなる。

ツァディーク用の語法と語義の分析に当たっても、ツェデク／ツェダカーの分析の際に用いた括りにできるだけ即する形で検討を進めていきたい。但し、ツァディークの章句の数が66回と多いので、新共同訳訳語の検討に有益と思われる、即ち、ツァディークの同定化に有益と思われる章句を選んで取り上げることにする。

1 知恵

(9 : 9, 10 : 21=命と共有, 10 : 31, 11 : 30=命と共有, 12 : 10, 23 : 24)

(1) 箴言 9 章 9 節

תֵּן לְחָכְמָם וְיִתְחַסְמוּ הוֹדַע לְצַדִּיק וְיִוְסַף לָהֶם

(口) 知恵ある者に教訓を授けよ、彼はますます知恵を得る。正しい者を教

7 シュミードによれば、ツァディークである者は、秩序に呼応するものであり、秩序の中に場をもち、生きることのできるものである。一方、ラーシャーは、秩序の外にある者であるが故に命に対する権利を失うものである。H.H. Schmid, *Gerechtigkeit als Weltordnung: Hintergrund und Geschichte des Alttestamentlichen Gerechtigkeitsbegriffes* (Tuebingen: J.C.B.Mohr, 1968), 160.

8 Cf. R. E. Murphy, *The Tree of Life: An Exploration of Biblical Wisdom Literature* (New York: Doubleday, 1990), 124.

えよ、彼は学に進む。

(新) 知恵ある人に与えれば、彼は知恵を増す。 神に従う人に知恵を与えれば、彼は説得力を増す。

新共同訳は「…すれば」と条件的に訳しているが（その可能性はある）、これは口語訳のように教訓詩における勧告と見た方がよいと思われる。ここではハーハーム（「知恵ある人」）とツァディーク（「神に従う人」）が並行関係にある。教訓詩である1-9章において、ハーハームはツァディークでもある、と考えられていると見てよいであろう。

9節の次の節、10節には、「主を畏れることは知恵の初め 聖なる方を知ることが分別の初め。」とあり、表面的には「神に従う人」という訳が文脈に合っているように見える。

(2) 箴言10章21節

שִׁפְתֵי צַדִּיק יִרְעוּ רָבִים וְאֵיילִים בַּחֲסֶר־לֵב יָמוּתוּ

(口) 正しい者のくちびるは多くの人を養い、愚かな者は知恵がなくて死ぬ。

(新) 神に従う人の唇は多くの人を養う。 無知な者は意志が弱くて死ぬ。

10章には「くちびる」（サファー）に関する格言が多く集められている（8, 10, 13, 18, 19, 21, 32）。この21節の格言では、ツァディーク（「神に従う人」）が牧者に譬えられている。牧者の比喩は神や王に使われるのが常であり、ツァディークに適用されているのはここだけである⁹。ツァディークは知者のように、正しい、健全な教えを提供して、共同体の福祉に仕える者である。この格言においてツァディークと対比されているのは、「死」に結び付けられているエヴィリーム（エヴィールの複数形「無知な者」）である。エヴィールは箴言に19回出て来る。ヘブライ語聖書全体で29回であるから、箴言に現れる頻度は圧倒的である。但し、ツァディークと対比されているの

9 Cf. R.E. Murphy, *Proverbs* (World Biblical Commentary 22; Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1998), 75.

は10章21節のみである。

このエヴィールは、1章7節では、「主を畏れる」者との対比で出て来る。しかし、一番多いのは「知恵ある者」あるいは「知恵」との対比で出て来る場合である（10：8，14，11：29，12：15，14：3，17：28，24：7，29：9）。

一般的に無知な者と対比されるべきはハーハーム（「知者」）であろう。しかし、10章21節ではそうはなっていない。従って、このツァディークとエヴィリームの対比は些か不自然であり、後句が付加であることも考えられる。即ち、後句が知者を賞賛するために補足された可能性がある¹⁰。この知者と愚者の対比に関して、ヴェスターマンは興味深い指摘をしている。彼によれば、ツァディークとラーシャーの対比は知者と愚者の対比格言よりは後の層に属する。なぜなら前者（ツァディークとラーシャー）の対比は後者（知者と愚者）の対比のように社会状況に対して何らの洞察を示しておらず、対比的な世界観にのみ関心を示しているからである¹¹。とにかく、「正しい者」（口）でも「神に従う人」（新）でもエヴィリーム（「無知な者」）との対比はうまくいかない。実は、スィフェテー―ツァディーク（「神に従う人の唇」）はツェデクの「2 政治(2)」の項で検討した16章13節のスィフェテー―ツェデクに近似している。新共同訳はスィフェテー―ツェデクを「正しいことを語る唇」と訳出していた。ツェデク／ツァディークの統一性・共属性を考慮するならば、新共同訳の「神に従う人」よりは、たとえ対比的にはうまくいっていないとしても、口語訳の「正しい者」の方がよいように思われる。

(3) 箴言23章24節

גוֹל [גִּיל] גוֹל [גִּיל] אָבִי צְדִיק יוֹלֵד [וְ] יוֹלֵד [וְ] חָסֵם וְיִשְׁמַח-[וְ]יִשְׁמַח בּוֹ

[] の単語はケレを示す。

(口) 正しい人の父は大いによるこび、知恵ある子を生む者は子のために楽しむ。

¹⁰ Cf. Westermann, *Roots of Wisdom*, 51.

¹¹ *Ibid.*, 56.

(新) 神に従う人の父は大いに喜び躍り 知恵ある人の親は、その子によって楽しみを得る。

この格言は、「父と母」を囲い込みとする22－25節の文脈の中にあり、賢い息子と愚かな息子の対照的格言である(10：1, 15：20, 29：3等参照)。9章9節同様、ツァディーク(「神に従う人」)はハーハーム(「知恵ある人」と並行関係にある。しかし、このツァディークは、「神に従う人」という訳が適しているように見える9章9節とは異なる文脈の中にあり、「神に従う人」という新共同訳の訳語が適切であるかどうかは疑問である。

2 政治(11：10, 28：12, 28, 29：2)

箴言には政治を司る王に対する批判は出てくるが(28：15, 16, 29：12), ツァディークに対する批判は出てこない。さらに言えば、王はツァディークとしては直接的に言及されてはいない。下記に列挙した章句に見られるように、ただ示唆されるだけである。

11章10節, 28章12節, 28章28節, 29章2節は同趣旨の格言である。代表として最後の29章2節のみを取り上げる。

箴言29章2節

בְּרִבּוֹת צַדִּיקִים יִשְׂמַח הָעָם וּבְמִשְׁלַל רָשָׁע יֵאָנַח עָם

(口) 正しい者が権力を得れば民は喜び、悪しき者が治めるとき、民はうめき苦しむ。

(新) 神に従う人が大いになると民は喜び 神に逆らう人が支配すると民は嘆く。

ツァディーク(「神に従う人」)の運命ではなく、その影響について語る対立的並行法の格言である。ツァディーク(「神に従う人」)は複数形であるが、ラーシャー(「神に逆らう人」)は単数形であり、鋭い対照をなしている¹²。

12 但し、箴言11：10では、ツァディークとラーシャーが両者とも複数形である。

ツァディークが「大いになると」、なぜ民は喜ぶのか。それは、民の嘆きを生み出すような政治をしないことが期待されるからである。ツァディークに期待されていることは、狭義の信仰的行為としての「神に従う」というよりは、正しい政治を行うことである。このツァディークには王（たち）が想定されていると考えられる。

3 経済 (10 : 16=命と死, 11 : 28)

(1) 箴言10章16節

פְּעֹלַת צַדִּיק לְחַיִּים תְּבוּאָת רָשָׁע לְחַטָּאָה

(口) 正しい者の受ける賃銀は命に導き、悪しき者の利得は罪に至る。

(新) 神に従う人の収入は生活を支えるため 神に逆らう者の稼ぎは罪のため。

この格言は、ハイーム（命）という言葉によって次の17節「論しを守る人は命の道を歩み 懲らしめを捨てる者は踏み誤る。」と密接に結び合わされている。ツァディーク（「神に従う人」とラーシャー（「神に逆らう者」）の対比は一般的なものであるが、ハイーム（「生活」）が「死」ではなく、「罪」と対比されている珍しい例である。ただこの場合、不可避的に裁きと死に結びつくところの悪人の生み出す罪が考えられているのであろう¹³。それ故に、この格言では、命－死の対比が正－悪の対比と結びつけられていると見ることが出来る。

テブーアト（「稼ぎ」）は「収穫」を意味する農業用語であり、ツェダカーの「3 経済(3)」の項で検討した16章8節にも出てきた言葉である¹⁴。そこでは不正な稼ぎが問題になっていた。この格言では、「神に従う」という信

13 Cf. William McKane, *Proverbs: A New Approach* (The Old Testament Library; Philadelphia: The Westminster Press, 1977), 425. C.H. Toy, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Proverbs* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1988), 209.

14 10 : 16 と関連する格言はツェダカーを使う格言（11 : 19, 12 : 28, 21 : 21）にも見られ、ツァディークとツェダカーとの共属性を窺わせる。

仰行為よりも、不正な稼ぎをしないことに関心がある、と見た方がよいであろう。とにかく、この格言は、通常祝福と見なされている富も悪しき者の手にあっては呪いとなることを示している¹⁵。

(2) 箴言11章28節

בוֹטֵחַ בְּעֵשֶׂרוֹ הוּא יִפֹּל וְכֹעֵלָה צְדִיקִים יִפְרָחוּ

(口) 自分の富を頼む者は衰える、正しい者は木の青葉のように栄える。

(新) 富に依存する者は倒れる。 神に従う人は木の葉のように茂る。

ツァディークが繁茂する樹木に例えられる例は詩編 1 編 3 節、92編13節等にも見られる。この格言では、ツァディーク（「神に従う人」）が「富に依存する者」と対比されている。「富に依存する者」とは珍しい表現で、詩編49編 7 節、52編 9 節に同じような内容の表現が出て来るに過ぎない。ツァディークが富に依存（信頼）する人でないとすると何に信頼する人なのであろうか¹⁶。

この格言に関してはツェダカーの「3 経済(1)」の項で見た10章 2 節と11章 4 節が思い起こされる。そこでは、富がツェダカー（正しい行い／善行）に基づくとき祝福されることが説かれていた。この11章28節でもツァディークに想定されているのは、正しい行い／善行をする人であろう。

4 裁判 (11 : 21=運命と共通, 17 : 26, 18 : 5, 18 : 17, 24 : 24, 29 : 7)

(1) 箴言11章21節

יָד לְיָד לֹא-יִנָּקָה דָּע וְיָרַע צְדִיקִים נִמְלֵט

(口) 確かに、悪人は罰を免れない、しかし正しい人は救を得る。

(新) 悪人は何代経ようとも罰を逃れえず 神に従う人の子孫は免れる。

先頭の言葉、ヤド レ・ヤド（手に手）を、口語訳は「確かに」、新共同訳

15 Cf. Toy, *Proverbs*, 209.

16 エレ 17 : 7-8 では、主に信頼する人が繁茂する樹木に譬えられている。

は「何代経ようとも」と異なる訳をしている。また後句のゼラを口語訳は正しい人を指すと見て、あえて訳していない¹⁷。しかし、新共同訳は字義通り「子孫」と訳している。それにより「何代経ようとも」という訳が生きるようになっていく。ただ BDB はヤド レ・ヤドの訳として surely を挙げている¹⁸。

この原因と結果の連関を示す格言では、ツァディーク（複数形「神に従う人」）とラー（単数形「悪人」）が法的文脈の中で対比されている¹⁹。BDB は形容詞としてのラーの意味を bad, evil としているが、ラーシャーと意味範囲は重なる²⁰。ツァディークは「悪人」と違い、裁判で罰を受けるような悪を犯さない、法的意味での「正しい人」である。「罰を受ける」ことに、何らかの形で神が関わることが含意されていたとしても、それはあくまでも含意であり、ツァディークを「神に従う人」と訳す積極的根拠とすることはできない。

(2) 箴言17章26節

גַּם עֲנוּשׁ לְצַדִּיק לֹא־טוֹב לְהַכּוֹת נְדִיבִים עַל־יֶשֶׁר

(口) 正しい人を罰するのはよくない、尊い人を打つのは悪い。

(新) 神に従う人に罰を科したり 高貴な人をその正しさのゆえに打つのはいずれも良いことではない。

この格言では、裁判において、ツァディークは無罪とされなければならないことが示されている。聖書の他の箇所でも、ツァディークは罪のない者（創18：22-32参照）、あるいは裁判に臨んでも無罪放免される者であることが示されている（申16：19, 25：1等参照）。

17 トーイは口語訳と同じ理解に立っている。Toy, *Proverbs*, 232-233.

18 BDB, 391.ヤド レ・ヤドは、交渉で手を打つことで合意がなされるところから出て来た表現とされる。Cf. Toy, *Proverbs*, 232.

19 箴12：13, 29：6参照。原因と結果の連関については、G.フォン・ラート（勝村弘也訳）『イスラエルの知恵』（日本基督教団出版局、1988）、193-212参照。

20 BDB, 948.

この格言では、ツァディーク（単数形「神に従う人」）とナーディーブ（複数形「高貴な人」）が並行関係にあり、ツァディークがナーディーブであることが想定されている。ナーディーブは、ヨージェル（「正しさ」）を行う人であり²¹、イザヤ書32章5-8節では、ナーバル（「愚か者」）と対比されている²²。

もはや、愚かな者が高貴な人とは呼ばれず ならず者が貴い人と言われることもない。

愚かな者は愚かなことを語り その心は災いをたくらむ。神を無視し、主について迷わすことを語り 飢えている者をむなしく去らせ 渴いている者の水を奪う。

ならず者の手管は災いをもたらす。彼は謀をめぐらし 貧しい者が正当な申し立てをしても 乏しい者を偽りの言葉で破滅に落とす。

高貴な人は高貴なことをはかり 高貴なことを擁護する。（イザ32：5-8）

「愚か者」と対比される限りにおいて、ナーディーブは身分ではなく、その精神と人格の気高さを言っているように思われる²³。イザヤ書を参照する限り新共同訳の「神に従う人」は悪くはない。しかし、箴言17章26節のツァディークは、愚か者が神を無視するというイザヤ書の文脈とは異なる法的文脈の中に置かれている。

(3) 箴言24章24節

אָמַר לְרָשָׁע צְדִיק אֵתָהּ יִקְבְּהוּ עַמִּים יִזְעַמוּהוּ לְאֲמִים

(口) 悪しき者に向かって、「あなたは正しい」という者を、人々はのろい、

21 どういう訳か、口語訳はヨージェル（「正しさ」）を訳出していない。刑罰としての「打つ」に関しては申25：1-2参照。

22 箴17：7でもナーディーブ（「高貴な人」）とナーバル（「愚か者」）が対比されている。ナーディーブとは、どのような人であろうか。勝村弘也氏は、ヨブ記29章に描かれている人物にナーディーブ（貴人）の姿を見ている。勝村弘也『詩編』（日本基督教団出版局、1992）、32-33。

23 Cf. BDB, 622.

諸民は憎む。

- (新) 罪ある者を正しいと宣言するなら すべての民に呪われ、すべての国にののしられる。

新共同訳では、ラーシャーが「罪ある者」と訳され、ツァディークが口語訳と同様に、「正しい」とツァディークの基本的意味で訳されている。同じ裁判関係の18章17節、17章15節（しかし、本稿では「ヤハウエ」の項で括っている）でも、新共同訳は、ツァディークを「正しく」、「正しい人」と訳している。前述のごとく、新共同訳がツァディークを「正しい（く）」あるいは「正しい人」と訳出している3箇所が全て裁判と関わる箇所であることが分かる。但し、すでにツァディークの「4 裁判(2)」の項で見た17章26節や次に見る29章7節のように、裁判に関わるものでも、そのように訳していない箇所もあり、統一、一貫しているわけではない。

(4) 箴言29章7節

יָרַע צַדִּיק דִּין רָשָׁע לֹא־יִבִּין דָּעַת

- (口) 正しい人は貧しい者の訴えをかえりみる、悪しき人はそれを知ろうとはしない。
- (新) 神に従う人は弱者の訴えを認める。 神に逆らう者はそれを認めず、理解しない。

ツァディーク（「神に従う人」）とラーシャー（「神に逆らう者」）の対比の格言である。ここでは、ツァディークがダリーム（「弱者」）の訴えを知り、理解する者となっている。先にツェデクの「3 裁判(2)」の項で見た31章9節「あなたの口を開いて正しく裁け 貧しく乏しい人の訴えを。」を参照するならば、ツァディークとはツェデクにおいて貧者の救済に関わるものである。このような人をどう表現すべきであろうか。確かにそのような人は広い意味

で「神に従う人」ではあろうが²⁴、それよりも、ツァディークは、正義の何たるかを知らないラーシャーとは異なり、正義を知って、貧者を救済するために正しい裁判に携わるよい人と理解されるべきであろう。

5 命と死 (2:20, 10:11, 16=経済と共通, 11:9, 11:30=知恵と共通, 21:15, 29:6)

(1) 箴言 2章20節

לִמְעַן תֵּלֶךְ בְּדֶרֶךְ שׁוֹבִים וְאַחֲרֹת צְדִיקִים תִּשְׁמֹר

(口) こうして、あなたは善良な人々の道に歩み、正しい人々の道を守ることができる。

(新) こうして あなたは善人の道を行き 神に従う人の道を守ることができよう。

この2章20節は「知恵」の項で括ってもよい、と考えられるが、前節、2章19節が命の道について語り、それと密接に関係しているので、「命と死」の項で括る方がより適切と考え、ここに取り上げている。この教訓詩において、ツァディーク（複数形「神に従う人」）の道がトーベーム（複数形「善人」）の道と並行関係にある（箴14:19参照）。Z. W. ファルクによれば、トーブ（「善」）は、福祉、安定を意味し、ときには正義の代りとして機能する²⁵。このツァディークは、次の節、2章21節の倫理的意味合いの強いイエシャールーム（「正しい人」）、テミーミーム（「無垢な人」）とも並行関係にある。

24 類似の裁判に関係する格言が28:5にある。そこでは、「裁き」（ミシュバート）を「理解する」人は「主を尋ね求める人々」となっている。「主を尋ね求める人々」とは、正義あるいは正しさが神の意志からのみ知られると理解するが故に、裁判において神の意志を尋ね求める人々のことを言う、と考えられる。Cf. Toy, *Proverbs*, 497. そのような人々は確かに「神に従う人」と言えると思う。しかし、そのように呼ぶよりは、「正義を求める人」、即ち、「正しい人」と呼んだ方がよいように思われる。

25 Ze'ev W. Falk, "Law and Ethics in the Hebrew Bible," ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman, *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence* (Sheffield: JSOT Press, 1992), 83.

並行関係を重視するかぎり、口語訳の方が優れているように思われる。

(2) 箴言11章9節

בְּפֶה הַנֶּהָר יִשְׁחַת רֵעֵהוּ וּבְרֵעַת צַדִּיקִים יִחְלָצוּ

(口) 不信心な者はその口をもって隣り人を滅ぼす、正しい者は知識によって救われる。

(新) 神を無視する者は口先で友人を破滅に落とす。神に従う人は知識によって助け出される。

前句と後句の内容的対比は必ずしも明解ではないが、ツァディークとハーネーフ（「神を無視する者」）との対比は明瞭である。ハーネーフは形容詞で、BDBはその意味として profane, irreligious を挙げている²⁶。この章句では、言葉で隣人を破滅させる者を意味している。この語は箴言ではここだけにしか出て来ないが、同じ知恵文学のヨブ記には8回出て来る²⁷。ヨブ記20章5節では、ハーネーフ（「神を無視する者」）とラーシャー（「神に逆らう者」）が並行的に語られている。従って、ツァディークとハーネーフの対比は、ツァディークとラーシャーの対比の変型の一つと見ることができる。ハーネーフ（「神を無視する者」）と対比されているツァディークを「神に従う人」と訳すのは悪くはない。しかし、この格言では、ツァディークが「信仰」ではなく、「知識」（ハーネーフまたは悪人の策略に気づく賢明さ？²⁸）によって助け出されると言っていると考えられるので、特に信仰的なことを言っているというわけではないように思われる。

(3) 箴言11章30節

פְּרִי־צַדִּיק עֵץ חַיִּים וְלֵקֶם נִפְשׁוֹת חָכָם

(口) 正しい者の結ぶ実は命の木である、不法な者は人の命をとる。

26 BDB, 338.

27 8 : 13, 13 : 16, 15 : 34, 17 : 8, 20 : 5, 27 : 8, 34 : 30, 36 : 13.

28 Cf. Murphy, *Proverbs*, 81.

(新) 神に従う人の結ぶ実は命の木となる。 知恵ある人は多くの魂をとらえる²⁹。

新共同訳に従えば、この格言は「知恵」でも括れるが、命のメタファである「命の木」に注目してここに置いている。「命の木」という表現は、箴言では、4回（3：18, 11：30, 13：12, 15：4）出て来るが、創世記（2：9, 3：22, 24）と箴言にしか出て来ない特異な語句である。

この格言における「命の木」とは何であろうか。他の人々にとって有益な言葉や行動のことであろうか。R.E. マーフィーはそのように考えている³⁰。

この格言において、後句が口語訳と新共同訳では異なる訳がなされている。口語訳は、七十人訳ギリシア語旧約聖書に従い、ハーハーム（「知恵ある人」）をハーマース（「不法な者」）の誤写だと考えているのであろう。とにかく、口語訳のようにツァディークを「不法な者」との対比ととれば、ツァディークは「正しい者」ということが導きやすいが、新共同訳のように、対立的並行法ではなく、統合的並行法の格言ととった場合、ツァディークは、先に「1知恵(1)」の括りで見たと同じ9章9節と同じハーハームと並行関係にあることになり、訳が難しくなる。

(4) 箴言21章15節

שְׂמִיחָה לְצַדִּיק עֲשׂוֹת מִשְׁפָּט וּמִחֲתָה לְפֹעֵלֵי אָוֶן

(口) 公義を行うことは、正しい者には喜びであるが、悪を行う者には滅びである。

(新) 裁きを行うことは、神に従う人には喜び 悪を行う者には滅び。

この格言では、ツァディーク（「神に従う人」）とポーアレー アーヴェン

29 興味深いことに七十人訳ギリシア語旧約聖書はツァディークをツェデクと読んでいる。即ち、「ツェデクの（結ぶ）実は命の木」となる。

30 Murphy, *Proverbs*, 84.

〔悪を行う者〕が対比されている³¹。ツァディークは悪を行わず、アソート ミシュパート (〔裁きを行う〕) の人である。この場合のミシュパートは、〔裁き〕よりも「正義」あるいは「公平」の方がよく通るように思われる³²。〔悪を行う者〕の対比は「神に従う人」というよりは、悪を行わない人＝正しい人の方がより適していると思われる³³。

6 運命 (4 : 18, 10 : 20, 21, 24, 25, 28, 30, 32, 11 : 8, 9, 10, 23, 28, 31, 12 : 3, 7, 12, 13, 21, 13 : 5, 9, 21, 22, 25, 14 : 19, 32, 15 : 6, 20 : 7, 21 : 12, 18, 23 : 24, 24 : 16)

(1) 箴言14章19節

שְׂחוּ רָעִים לְפָנַי טוֹבִים וְרָשָׁעִים עַל־שַׁעְרֵי צְדִיק

(口) 悪人は善人の前にひれ伏し、悪しき者は正しい者の門にひれ伏す。

(新) 神に逆らう者は神に従う人の門の前に 悪人は善人の前に、身を低くする。

この格言には、同義語的並行法が使われており、ツァディーク (〔神に従う人]) とトービーム (複数形「善人」) が並行をなして、これまた同義的並行関係にあるレシャイーム (複数形「神に逆らう者」) とラーイーム (複数形「悪人」) と対比されている。

「身を低くする」とは、物乞い、僕となることかも知れない³⁴。善が悪に

31 ツァディークに冠詞がついている。ツァディークに冠詞がつくのは、1つの例外 (9 : 9) を除き、接頭前置詞ラメドのつく場合だけである (12 : 21, 13 : 22, 17 : 26, 21 : 15, 21 : 18)。

32 箴 21 : 7 で、新共同訳は、同じ「アソート ミシュパート」を「正義を行うこと」と訳出している。口語訳はミシュパートを多くの場合「公義」と訳出し、ツェデクも2箇所 (申 16 : 20, コヘ 3 : 16) 「公義」と訳し、さらにツェダカーも1箇所 (列上 3 : 6)、そのように訳出していたが、新共同訳からこの訳語は消えた。

33 Cf. R.B.Y. Scott, *Proverbs · Ecclesiastes* (The Anchor Bible; Garden City, New York: Doubleday & Company, Inc., 1965), 124.

34 Cf. Murphy, *Proverbs*, 105. Toy, *Proverb*, 293.

対して優位性をもっているという教訓的格言であるが³⁵、ツァディークの倫理的性格が強調されている格言であり、「神に従う人」よりも口語訳の「正しい者」の方が適切な訳と考えられる。

(2) 箴言13章21節

חַטָּאִים תִּרְדֹּף רָעָה וְאֶת־צַדִּיקִים יִשְׁלֹם־טוֹב

(口) 災は罪びとを追い、正しい者は良い報いを受ける。

(新) 災難は罪人を追う。神に従う人には良い報いがある。

この21節と次節、22節の両節は、日本語訳からは分りにくいですが交差法によりその結びつきが強められている。ここではツァディーク（複数形「神に従う人」）とハッタイム（複数形「罪人」）が対比されている。箴言でツァディークと罪人が対比で取り上げられるのは、この他に2箇所ある（11：31, 13：22）。箴言において罪人はラーシャーであり、社会の道徳的安定を脅かし、他の人に対して非倫理的行為をなすが故にヤハウエに忌み嫌われる者である³⁶。罪人の対極にあるツァディークは正しい、善なる行為によって良い報いを受ける者である。

(3) 箴言21章18節

כֹּפֵר לְצַדִּיק רְשָׁע וְתַחַת יְשָׁרִים בּוֹגֵד

(口) 悪しき者は正しい者のあがないとなり、不信実な者は正しい人に代る。

(新) 神に逆らう者は神に従う人の代償とされ 欺く者は正しい人の身代金にされる。

これは、謎に満ちた格言である。なぜツァディークに「贖い」が必要なのか。神の裁きが集団に下されたとき、ツァディーク（「神に従う人」）はそれを免

35 Cf. Raymond C. Van Leeuwen, "The Book of Proverbs: Introduction, Commentary, and Reflections," in *The New Interpreter's Bible V* (Nashville: Abingdon Press, 1997), 142.

36 ヤハウエに忌み嫌われものについては箴6：16-19参照。Cf. Robin C. Cover, "Sin, Sinners," in *the Anchor Bible Dictionary VI* (New York: Doubleday, 1999), 31-40.

れるが、ラーシャー（「神に逆らう者」）はそうではないことを言っているの
 であろうか³⁷。意味は必ずしも明確ではないが、ツァディークとラーシャー
 の対比は明らかである。ここでは、ラーシャーとボーゲード（「欺く者」）、
 ツァディークとイエシャーリーム（「正しい人」）が同義的並行関係にある
 （11：8参照）。ツァディークはイエシャーリーム（「正しい人」）により性格
 づけがなされている。

7 ヤハウエ（3：33，10：3，15：29，17：15＝裁判と共通，18：10）

ツァディークは言うまでもなく、ヤハウエの信仰者であり、敬虔な者であ
 るが、そのヤハウエとの関係はどのように見られているのであろうか。新共
 同訳がツァディークを「神に従う人」と訳出している例が多いので、関連章
 句を全て取り上げる。

(1) 箴言 3 章33節

מֵאֵרֶת יְהוָה בְּבַיִת רָשָׁע וְהָנָה צְדִיקִים יִבְרָךְ

(口) 主の、のろいは悪しき者の家にある、しかし、正しい人のすまいは主
 に恵まれる。

(新) 主に逆らう者の家には主の呪いが 主に従う人の住みかには祝福があ
 る。

1－9章の教訓詩におけるツァディーク（「主に従う人」）とラーシャー（「主
 に逆らう者」）の対比である³⁸。ネヴェ ツァディーキーム（「主に従う人の
 住みか」）は、箴言では、もう1回ラーシャーに対する警告の形で出てくる
 （24：15）。ツァディークの住居はツェデクのある住居であり、それはツァ
 ディークが受けるに値する神の祝福と保護の下にある住居のことである（ヨ

37 Cf. Murphy, *Proverbs*, 160-161. Toy, *Proverbs*, 406.

38 新共同訳が「神に従う人」ではなく、「主に従う人」にしているのは、同節に「主」
 （ヤハウエ）という語が出て来るからであろう。

ブ 8 : 6 参照)³⁹。ヴェスターマンは、ツァディークとラーシャーの対比の格言は、ヤハウエとその行為についての教えではなく、ツァディークとラーシャー両者の対照を際立たせることを目的にしている、と主張する⁴⁰。この意見に耳を傾ける限り、ツァディークを「主に従う人」と訳することに慎重にならざるを得ない。

(2) 箴言10章3節

לֹא־יִרְעִיב יְהוָה נֶפֶשׁ צַדִּיק וְהוֹנֵת רְשָׁעִים יְהוָה

(口) 主は正しい人を飢えさせず、悪しき者の欲望をくじかれる。

(新) 主は従う人を飢えさせられることはない。逆らう者の欲望は退けられる。

この格言において、ツァディーク（「従う」）は形容詞として、ネフェシュ（「人」）を修飾している。新共同訳の「従う」はスムーズな適訳のようにも見える。ただこの格言はツァディークとラーシャーの対比の格言である。そのことを勘案する限り、上記3章33節同様、新共同訳の「従う人」は適切とは言えない。

(3) 箴言15章29節

רְחוֹק יְהוָה מִרְשָׁעִים וְהַתְּפִלָּת צַדִּיקִים יִשְׁמָע

(口) 主は悪しき者に遠ざかり、正しい者の祈りを聞かれる。

(新) 主は逆らう者に遠くいますが 従う者の祈りを聞いてくださる。

新共同訳はツァディークを「従う者」と訳出しているが、このツァディークには「主が近くにいてくださる」者の意が強いであろう。この格言では、空間的イメージが用いられており、主との距離が問題になっている。主がツァ

39 エレミヤは神殿の丘を「正義の住まうところ」（ネヴェ ユエデク）と呼ぶ（31 : 23）。

40 Westermann, *Roots of Wisdom*, 83.

ディークに近くいますが故にその祈りは聞かれるのである。この格言も上記の10章3節同様、ツァディークとラーシャーの対比の格言であること、さらには、この格言の後句と並行をなしている15章8節後句の、ヤハウェはイエシャリーム（「正しい人」）の祈りを喜ばれる、を考慮するならば、ツァディークの訳としては、口語訳の「正しい者」方がより適切であると考え。

(4) 箴言17章15節

מִצְדִּיק רָשָׁע וּמִרָשָׁע צְדִיק תּוֹעֵבַת יְהוָה גַּם־שֹׂנְאֵיהֶם

- (口) 悪しき者を正しいとする者、正しい者を悪いとする者、この二つの者はともに主に憎まれる。
- (新) 悪い者を正しいとすることも 正しい人を悪いとすることも ともに、主のいとわれることである。

新共同訳が、裁判関連のツァディークを「正しい(人)」（無罪の人）と訳出することについてはすでに触れた。主は無罪の人を有罪として、有罪の人を無罪とすることを忌み嫌われる。

これは不正な裁判手続きを取扱う格言なので、「裁判」でも括れる章句であり、「4 裁判(2)」で取り上げた17章26節とも密接に関係している。新共同訳に違和感はない。

(5) 箴言18章10節

מְהֵרָא־עַל שֵׁם יְהוָה בּוֹ-יָרוּץ צְדִיק וְנִשְׁבַּב

- (口) 主の名は堅固なやぐらのようだ、正しい者はその中に走りこんで救を得る。
- (新) 主の御名は力の塔。 神に従う人はそこに走り寄り、高く上げられる。

この格言は、次に来る18章11節「財産は金持ちの砦、自分の彫像のそびえる城壁。」と対で読むならば、「経済」の項で括るべきものかも知れない。しかし、この格言は、財産に対する信頼ではなく、「主の御名」（箴言ではここに

だけ出てくる表現)への信頼からくる安全を訴えているので、ここで取り上げている。このツァディークは「神に従う人」より「主を信頼する人」と表現した方が合っているように思われる。

以上、ヤハウエとツァディークとの関係を見たのであるが、多くはツァディークとラーシャーの対比の格言であり、ヴェスターマンの主張するように、ヤハウエは、ツァディークとラーシャーのコントラストを補強する以外の役割を与えられていないように見える⁴¹。

8 行為 (10 : 32, 12 : 5, 10, 26, 15 : 28, 20 : 7, 21 : 26, 25 : 26, 28 : 1, 29 : 6, 29 : 27)

(1) 箴言10章32節

שְׂפֵתֵי צַדִּיק יִרְעוּן יִרְעוּן וְפִי רָשָׁעִים תִּהְפְּכֹת

(口) 正しい者のくちびるは喜ばるべきことをわきまえ、悪しき者の口は偽りを語る。

(新) 神に従う人の唇は好意に親しみ 神に逆らう者の口は暴言に親しむ。

ツァディーク（「神に従う人」）とラーシャー（「神に逆らう者」）の対比の格言である。前節の31節「神に従う人の口は知恵を生み 暴言をはく舌は断たれる。」と共に、言葉の重要性、特に正しいことと、そうでないことを語る事がテーマとなっている。スイフェテー ツァディーク（「神に従う人の唇」）は、ツェデクの「2 政治(2)」の項で見た16章13節のスイフェテー ツェデク（「正しいことを語る唇」）と同じ意味である。従って、ここでは、ツァディークには「神に従う」ことより、率直、正直に語る人が含意されていると考えべきであろう。

41 Westermann, *Roots of Wisdom*, 83. ついでながら、箴言には悪しき者、罪人に憐れみ深い神は出て来ない。

(2) 箴言12章5節

מְחֻשְׁבוֹת צְדִיקִים מְשַׁפֵּט תְּחִלָּוַת רְשָׁעִים מְרָמָה

- (口) 正しい人の考えは公正である，悪しき者の計ることは偽りである。
 (新) 神に従う人の計らいは正義。神に逆らう者の指図は，裏切り。

ツァディーク（「神に従う人」）とラーシャー（「神に逆らう者」）の対比の格言である。ツァディークはミシュパート（「正義」）を「計ら」う人である⁴²。ミシュパート（「正義」）からツェダカーの「5ヤハウエ(2)」の項で見た21章3節「神に従い正義を行うことは いけにえをささげるよりも主に喜ばれる。」との結びつきを感じさせる。そのツェダカーを新共同訳は「神に従い」と訳出しているので、訳語の統一はなっていると思うが、訳の適切性という点ではどうであろうか。

(3) 箴言12章10節

יָדַע צְדִיק נֶפֶשׁ בְּהֵמָתוֹ וְרַחֲמֵי רְשָׁעִים אֲכֹרֵי

- (口) 正しい人はその家畜の命を顧みる，悪しき者は残忍をもって，あわれみとする。
 (新) 神に従う人は家畜の求めるものすら知っている。神に逆らう者は同情すら残酷だ。

「残忍をもって，あわれみとする」（口）という一種の撞着語法を用いるこの格言でもツァディーク（「神に従う人」）とラーシャー（「神に逆らう者」）が対比されている⁴³。ツァディークは「家畜の求めるものすら知っている」者として描かれている（箴27：23-27参照）⁴⁴。ツァディークが，声をあげることでできない他者のニーズ，要求，性向を理解する力を有する者と見られて

42 後句のタフプロート（「指図」）は箴1：5では、悪い意味ではなく、良い意味で使われている。

43 Cf. Murphy, *Proverbs*, 90.

44 動物への配慮については、出23：12、レビ25：7、申22：6-7、25：4参照。

いるのであろう。この力は信仰とは直接的に結びつけて考えられていないと思われる。

(4) 箴言20章7節

מִתְחַלְּץִים בְּתוֹמָהּ צְדִיק אֲשֶׁרֵי בָנָיו אֲחֵרָיו

(口) 欠けた所なく、正しく歩む人—その後の子孫はさいわいである。

(新) 主に従う人は完全な道を歩む。 彼を継ぐ子らは幸い。

口語訳はツァディークを副詞的に「正しく」と捉え、新共同訳は「主に従う人」と名詞的に訳している。両者の訳が可能である。新共同訳に限って言えば、ツァディーク（「主に従う人」）は、ベ・トゥモー（「完全な」）道を歩む人とイコールで捉えられている。トーム（**תום**）は「完全、誠実、無垢」を意味する名詞である。この場合は「誠実」の意味が強であろう⁴⁵。トーイは、トームの意味として、罪のないことではなく、神あるいは人間の法に心から誠実であろうとすることを意味すると言っている⁴⁶。トームは箴言では7回出てくるが、全て「道」と関係して出て来る（2：7，10：9，29，13：6，19：1，20：7，28：6）。これはこの言葉が具体的行動と関係していることを示している。

ツァディークとアシュレー（「幸い」）が同時に出てくる章句は、ヘブライ語聖書中ここだけである。箴言において、アシュレーは7回出てくるが、1－9章の教訓詩では、知恵を見いだし（3：13）、知恵の道を守り（8：32）、知恵に聞く人（8：34）がアシュレーな者と言われている。その他、貧者を憐れむ人（14：21）、主を信頼する人（16：20）、常に恐れを抱く人（28：14）がアシュレーの対象として挙げられている。

新共同訳がツァディークを「神に従う人」ではなく、「主に従う人」と訳出しているのは、同じ20章の10節、12節、22節、23節、24節、27節に「主」

45 Cf. BDB, 1070.

46 Toy, *Proverbs*, 385. 並木浩一『「ヨブ記」論集成』（教文館，2003），222，231では、トームは「高潔」あるいは「他者との関係において非のないこと」と説明されている。

(「ヤハウエ」) という語が出て来るためと思われる。20章7節は、「主に従う人」よりも義人とされるヨブにもトーム (「完全」) の形容詞ターム (「無垢な」) (ヨブ1:1) が使われているのを鑑みて「義しい人」のような造語による訳もよいかも知れない。

(5) 箴言25章26節

מִעֵיץ נִרְפָּשׁ וּמִקֹּוֹר מְשֻׁחָת צְדִיק מִטּ לְפָנֵי־רָשָׁע

(口) 正しい者が悪い者の前に屈服するのは、井戸が濁ったよう、また泉がよごれたようなものだ。

(新) 泉が踏み汚され、水源が荒らされる。 神に従う人が神に逆らう者の前によろめく。

ツァディークの「根は揺らぐことがない」(12:3) のに、ツァディークがラーシャーの前で「よろめく」(＝神義論への確信を失うことか⁴⁷) と、悪人が思い上がり、「命の源」(＝共同体の生命線) が危険にさらされることになる。この格言では、ツァディークの「神に従う」側面よりも、共同体にとっての命の源なるツァディークの存在が強調されている、と考えるべきであろう。

(6) 箴言29章27節

תּוֹעֵבַת צְדִיקִים אִישׁ עוֹל וְחוֹעֵבַת רָשָׁע יִשְׂרָאֵל־דָּרָךְ

(口) 正しい人は不正を行う人を憎み、悪しき者は正しく歩む人を憎む。

(新) 神に従う人は悪を行う者を憎む。 神に逆らう者は正しく歩む人を憎む。

これまたツァディーク (複数形「神に従う人」) とラーシャー (単数形「神に逆らう者」) の対比の格言である。トーエーバー (「憎む」) は、ツェダカー

47 McKane, *Proverbs*, 593 は神義論が危機に直面している何らかの状況を想定している。

の「5ヤハウエ(1)」の項ですで見たとように、「忌み嫌う」を意味する祭儀的用語であるが、箴言では、それが倫理的に使われている。ツァディークがトーエーバーする主体となるのはここだけである⁴⁸。

この格言では、ツァディークが「悪を行う者」をトーエーバーする者であることが語られている。主の忌み嫌うことがツァディークにも反映されている、ということであろう。ツァディークは主が忌み嫌うものを忌み嫌うという点で、*imitatio Dei* である。その意味では、ツァディークは「神に従う者」であると言える。しかしながら、ツァディークは、「悪を行う者」、あるいはラーシャーの対極にあり、「正しく歩む人」と同義的並行関係にあるが故に、ツァディークの信仰的位相よりも倫理的位相こそが考察の対象とされるべきと考える。

以上、ツァディークの用語法と語義を検討した。箴言にはツァディークの定義はないが、それでも箴言におけるツァディーク像を描くことは、それなりに可能である。ツァディークとラーシャーの対比の格言から判断するかぎり、ツァディークは、邪悪な者、犯罪に関わる者、無知な者、神を無視する者、悪を行う者、富に依存する者、罪人等の対極にある者であり、善人、知恵ある者、気高い者、正しい者等と同義的並行関係にある。同義的並行関係は、完全なる同定化を意味しないとしても、相補的であり、意味の強化関係にあり、ツァディークの意味の位相を与えている。以上のことから箴言におけるツァディークを次のようにまとめることができよう。

ツァディークは行動する者である。信仰に基づいて完全（誠実・高潔）な道を歩み、正義／公平を行い、弱者（貧者）の訴えを聞き、悪を行う者を忌み嫌う者であり、共同体の人々から尊敬される人生を歩んでいる者である⁴⁹。このような人は何と訳するのが適切なのであろうか。

48 箴言で、これまた1回だけトーエーバーの主体となる例として王が箴16:12に出て来た。そこでも王に対して複数形が使われている。

49 しかし箴言には、苦難のツァディークという表現は出てこない。

Ⅲ 箴言におけるツェデク／ツェダカー／ツァディークの新共同訳訳語の検討

これまでのツェデク／ツェダカー／ツァディークの用語法と語義の検討の段階で、すでに新共同訳の検討を必要に応じてやってきたのであるが、ここで、改めてまとめの意味で新共同訳の訳語の検討を試みたい。

A ツェデクについて

箴言において、ツェデクは知恵の内容あるいは知恵ある行動を指し示す言葉である。新共同訳は、ツェデクの訳として、箴言の捕囚後の収集と考えられる神学的色彩の濃い序の部分の1-9章の2箇所(1:3, 2:9)を「正義」と訳出して、後の7箇所は「正しい(く)」、「正しいこと」と訳出している。ツェデクの基本的語義(共同体の信義に基づく「正しさ」にあると思われるが)を重視した訳であり評価できる。ツェデクは「正義」以上のより広い意味を含むものであるが、1-9章の2箇所(1:3, 2:9)については、捕囚後のツェデクが概念が預言者によって影響された道徳的位相をもつとの注解者の意見を入れるならば(イザ11:1-5参照)、新共同訳の「正義」でもよいのかも知れない⁵⁰。

B ツェダカーについて

新共同訳はツェダカーの訳に関しては、ツェデクとの統一性・共属性をあまり重視せず、転義的に大胆な訳を試みている⁵¹。

まず、新共同訳がツェダカーを「慈善」と訳出している場合が一番多いのであるが、『新共同訳聖書辞典』の「慈善」の項(pp.222-223)によれば、それは、特別な善意としてではなく、人間として当然なすべき貧しい人々へ

50 Cf. Van Leeuwen, "The Book of Proverbs," 33. 但し, Scott, Proverbs · Ecclesiastes, 33 は、ツェデク、ミシュパート、ミシャリーム(「正義と裁きと公平」)を "What is right and proper and equitable" (「正しい、適切、公平なところのもの」)と訳出している。勝村弘也「箴言」『新共同訳 旧約聖書注解Ⅱ-ヨブ記-エゼキエル書-』(日本基督教団出版局, 1994), 188における新共同訳の「正義と裁きと公平」批判参照。

51 ツェダカーはコヘレトの言葉には出て来ない。新共同訳のヨブ記では、「正しさ(い、く)」(27:6, 33:26, 35:8)「憐れみ」(37:23)と訳出されている。

の思いやりの行為と解説されている⁵²。確かに箴言には貧者への関心が強く、神と貧者の同定化も語られている（14：31，17：5参照）。箴言の時代に「慈善」があったと思われる⁵³。しかし、ツエダカーの訳語として「慈善」は意味範囲を狭め過ぎると思われる。ツエダカーには「慈善」を含む政治、経済、裁判上の貧者への連帯や思いやりの実践が含意されていると思われるからである。

新共同訳はツエダカーを「慈善」と訳すに際して、どのような確証のもとでこのような訳に踏み切ったのであろうか⁵⁴。実はヘブライ語聖書で最も遅い成立（BCE160頃）の書として知られるダニエル書のアラム語の部分に出てくる4章24節のツエダカーを、新共同訳は「施しを行ない」と訳出している（口語訳は「義を行なって」⁵⁵）。この章句のツエダカーを「慈善」あるいは「施し」と訳すことに対して、M. ヴァインフェルトやF. ローゼンタールのような学者も賛意を表明している⁵⁶。しかし、ダニエル書4章24節のアラム語に「慈善」の意味を認めるローゼンタールも、箴言8章18節、10章2節、11章4節において、ツエダカーに認められるのは、福祉（平和）、助け、力、祝福等の具体的な内容であり、「慈善」ではない、と主張している⁵⁷。正直なところ、箴言において、「慈善」という訳が適切と感じる箇所を見つける

52 『新共同訳聖書辞典』（キリスト新聞社、1995）、222-223。

53 21：26後句「神に従う人（ツァディーク）は与え、惜しむことはない」の「与え」や11：24の「散らして」には、施しが想定されていると思われる。

54 勝村弘也「箴言」、200によれば、新共同訳の「慈善」はラビ的解釈の「喜捨」「献金」を採用したことによるようである。興味深いことに、そのラビ的解釈はユダヤ教のJPSの訳には反映されていない。

55 口語訳の場合、節がずれて4：24ではなく、4：27となっている。

56 Moshe Weinfeld, “Justice and Righteousness”-צדקה וצדק-: The Expression and Its Meaning,” ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman, *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence* (Sheffield: JSOT Press, 1992), 236. Franz Rosenthal, “Sedaka, Charity,” *Hebrew Union College Annual* 23 No.1 (1950-51), 427 and 430 n. 60. シュミードは、ダニ4：24にツエダカーの「施し」の意味の開始を想定している。Schmid, *Gerechtigkeit als Weltordnung*, 144. 但し、A. ホーはヘブライ語聖書において、他の学者たちが主張するようなツエダカーに「慈善」の意味を見いだすことが出来ないと主張し、それは聖書後のアラム語からの発展であるとする。Ahuva Ho, *Sedeq and Sedaqah in the Hebrew Bible* (New York: Peter Lang, 1991), 142.

57 Rosenthal, “Sedaka, Charity,” 427 and 430 n. 60.

ことは困難であった。

次に、新共同訳はツェダカーを数箇所「(神に) 従う (い)」(15: 9, 16: 12, 31, 21: 3) と訳出しているのであるが、箴言を単なる格言の書、処世訓ではなく、信仰の書であることを強調したかったのかも知れないが、このような訳は、箴言が創造論に根をもつところの普遍的・倫理的方向性の軽視に繋がらないかと危惧される⁵⁸。

第三に、ツェダカーを「恵みの業」(16: 8), 「恵み」(21: 21) と訳出している点についてであるが、これはツェダカーが理念的というよりは、より具体性をもつことを示した点で評価できると思う。しかし、「恵み」(21: 21) という言葉で何が想定されているのであろうか。ほぼ「慈善」と同じような愛に動機づけられた義務を越えた行為を含意させているのであろうか⁵⁹。それとも神の恵みか。

実は、新共同訳の詩編では、神の業としてのツェダカーが「恵みの御業」と訳されている箇所が多くある(詩36: 7, 40: 11, 71: 2, 15-16, 19, 24, 103: 6, 143: 1 等参照)。これは文脈から「救いの業」とも捉えられるものであり(例えば詩71: 2, 15), 理解できる訳である。しかし、箴言にはツェダカーが直接的に神の業を言及していると理解されるものは一つも出て来ない。そのような場合はどう考えるべきであろうか。この場合の「恵み」は「神の恵みの御業」の反映とでも考えられているのであろうか。疑問は尽きない⁶⁰。

C ツァディークについて

新共同訳は、ツァディークとラーシャーの二項対立的格言において、多くの場合ツァディークを「神に従う人」と訳し、口語訳がツァディークに当て

58 並木浩一「六『文学書』について」『日本の神学』30(1991), 207では、古代東方世界の王イデオロギーの観点から、16: 12の口語訳の適切性が支持されている。

59 Falk, "Law and Ethics in the Hebrew Bible," 85は、ツェダカーにそのような意味があると考えている。

60 関根清三「四『預言書』について(1)イザヤ書、エレミヤ書—中沢洽樹『イザヤ書、新訳と略註』と比較しつつ—」『日本の神学』30(1991), 192におけるイザヤ書の新共同訳「恵みの業」訳批判参照。

ていた「正しい人」を、ツァディークの同義語である「真直ぐ」を意味するヤーシャル（あるいは複数形のイエシャリーム）に当てている。

まず、細かいことを言えば、ツァディークには「神」という言葉は含まれていないので、これは意識である。この訳語は、ツァディークに「神」（エロヒーム）という語が含意されているかのような誤解を招きかねない。箴言にはそもそも「神」（エロヒーム）は5回（2：5，17，3：4，25：2，30：9）しか出てこない（しかも箴言の中心部分である10-29章では25：2の1回のみ）⁶¹。新共同訳はマソラ・テキストの箴言にはない「神」という言葉を思わぬ仕方でも増やしたことになる⁶²。ツァディークの対極にあるラーシャーを「神に逆らう者」と訳出しているので、「神」の数は80回以上となり相当なものとなる⁶³。

次に、新共同訳は、ツァディークを箴言以外でも「神に従う人」と訳しているのであろうか。概観するところ、そうはなっていない。五書および歴史書では、圧倒的に「正しい者（人）」が多い。預言書でも「主（神）に従う人者（人）」よりも「正しい人（者）」の方が2倍以上多い、しかし、詩編では「主（神）に従う人者（人）」がほとんどである。同じ知恵文学のヨブ記では、「神に従う人」（12：4，17：9，22：19，36：7）、「正しい（人）」（27：17，32：1，34：17）と二極分化した形で訳されている。さらに箴言のようなツァディークとラーシャーの対比ではないが、コヘレトの言葉にもツァディークとラーシャーが現れる。しかし、一度も「神に従う人」／「神に逆らう人」とは訳されていない。それぞれ「正義を行う人」／「悪人」（3：17）、「善人」／「悪人」（7：15，8：14，9：2）、「善人」（7：16）、「善のみを行（う）人間」（7：20）、「善人」（9：1）である。これだけから判断すると、ツァディークの訳に関して、詩編と箴言が共同路線をとっているように

61 しかし、「主」（ヤハウエ）は87回出て来る。

62 すでに見たように、口語訳も例外的に21：12で、ツァディークを「正しい神」と訳出していて、ツァディークにない神という言葉を使っている。

63 勝村弘也「箴言」194は、新共同訳の訳語「神に従う人」、「主に従う人」の不適切性を批判し、新共同訳の「神に逆らう者」にドイツ語のゴットローズの影響を見ている。七十人訳もウルガタもツァディークを「神に従う人」とは訳出していない。

見える。

『新共同訳聖書辞典』の「箴言」の項に次のような文が見られる。

一見、この世俗的に見える生活の知恵の背後には、イスラエルの神髄である「良い生活の必須の基礎は、宗教的信仰にある」という、預言者精神が吸収されている。「主を畏れることは知恵の初め」(1:7)に見られるように、「畏れること」(イルエー)という名詞は箴言に14回用いられ、旧新約のいずれの書よりも、この語の引用が多い⁶⁴。

これを手がかりとするならば、ツァディークを「神に従う人」と訳したのは、箴言の生活の知恵の背後には宗教的信仰があり、それは「主を畏れること」という聖書中一番多く出て来る言葉によって証拠付けられているからである、ということになろうか。ただ「主を畏れること」は、確かに宗教的信仰ではあるが、知恵とヤハウエ信仰の「深遠で解きたい統一の範例」であり⁶⁵、それは悪を避けることと密接に結びつけられていることに注意が必要である(3:7, 8:13, 16:6, ヨブ1:1)。

預言書や詩編では、神の正しさが問題にされるが、箴言では人の正しさに重きがおかれて問題となっていると見るべきであろう。と同時に、預言書や詩編は、神と人との正しい関係に関心を示すが、箴言では人の生活状況に、より多くの関心を示していることも事実である。ツェデク／ツェダカーが神との関連で、あるいは神の領域を表現するために使われている詩編や預言書では、ツァディークが「神に従う人」と訳す可能性が大きくなることもあろう。例えば、イザヤ書に箴言4章18節とよく似た章句が出て来る。

וְאִרְחָ צְדִיקִים כְּאוֹר נֹהַר הַיּוֹלֵךְ וְאוֹר עֵרֶב-נֶכּוֹן הַיּוֹם (箴言4:18)

(新) 神に従う人の道は輝き出る光 進むほどに光は増し、真昼の輝きとな

64 『新共同訳聖書辞典』, 256.

65 Murphy, *The Tree of Life*, 126.

る⁶⁶。

אַרְחָ לְצַדִּיק מִיִּשְׂרָאֵל יִשָּׂר מִעֲגֹל צַדִּיק תְּפִלָּס (イザ26:7)

(新) 神に従う者の行く道は平らです。あなたは神に従う者の道をまっすぐにされる。

新共同訳は、イザヤ書のツァディークを「神に従う者」と訳出しているのであるが、これはそれほど違和感はない。なぜなら、これはヤハウエとの対話の文脈にあるからである。しかし、箴言の場合にはそれがない。箴言では語りかけることはない⁶⁷。祈り(30:7-9の1箇所のみ)はあっても、これは例外的である。箴言には、預言書や詩編のように、神の言葉や神の救済的行為が具体的に語られていない。そのようなところで、その応答のような「神に従う」という告白的言語はなじまないのではないか。とにかく箴言ではツァディーク、ラーシャーは、神に従うのかどうかで区別されているのではない。

ツァディークは、箴言では、信仰よりも倫理的色彩の強い言葉であり、生き方に直接的に関係している、との印象を受ける。即ち、箴言では、預言書や詩編のように、ツェデク／ツェダカーが神から来るが故に、人はそれに生きることができると思っていたとしても、共同体の中で正しく生きることにより大きな関心を示している⁶⁸。神学的色彩の強い箴言1-9章においてもヤハウエと知恵との関係は隠れた関係である⁶⁹。その意味で、繰り返しになるが、「神に従う人」、「神に逆らう者」という訳は、ツァディーク、ラーシャーを対極化することで示そうとしている創造の秩序に基づく普遍的・倫理的な世界観を狭めてしまうのではないかと恐れる⁷⁰。

確かに(多分に感覚的印象からの判断ではあるが)、「神(主)に従う人」

66 新改訳は箴言において、ここだけツァディークを「義人」と訳出している。

67 Cf. Westermann, *Roots of Wisdom*, 130. その代わりというわけではないかも知れないが、箴言1-9章では、人格化された知恵の語りかけが出てくる。

68 Cf. Ho, *Sedeq and Sedaqah*, 146. 詩94:7では、ラーシャーが神の支配を拒絶するが、箴言では、ラーシャーはそのように神と対峙することはない。

69 Cf. Murphy, *The Tree of Life*, 1.

70 並木浩一「六『文学書』について」、203参照。

でもよいと思われた箇所（9：9，11：9あるいは29：27も）がないわけではないが、そのような場合でも、箴言のツァディークが「神に従う人」と訳するほどの告白的確信の言葉なのかどうか、疑問が残る⁷¹。

D 「義」，「義人」について

新共同訳は「語句の概念性をそのまま訳文に持ち込まないようにしようとした翻訳方針の結果」らしいが⁷²，口語訳同様に、箴言において、「義」，「義人」という語句を1回も使用していない。しかし、だからと言って、箴言におけるツェデク／ツェダカー／ツァディークの訳として「義」，「義人」が全く不適切かと言えば、そうとも言えない。統一的・共属的訳出を目指そうとする者にとって捨てる難しい選択肢の一つである。本稿の目的である新共同訳の批判的検討という範囲を越えることではあるが、最後に、箴言におけるツェデク／ツェダカー／ツァディークの訳としての「義」と「義人」について簡単に感想めいたことを述べたい。

まず、すでに触れたことであるが、新改訳は、箴言におけるツェデク／ツェダカーの訳を、ある箇所では「義」、他の箇所では「正義」と訳し分けている⁷³。「義」と「正義」はどう違うのか難しい問題である⁷⁴。それなりの判断基準があつてのことだと思うが、どのような基準で「義」と「正義」が訳し分けられることになったのか必ずしも明瞭とは言えない。

「義」も「正義」も定義の難しい、その意味確定の困難な言葉である。「義」は広義では「正義」と意味範囲が「正しさ」という点で重なる部分があると

71 『新共同訳 旧約聖書注解Ⅱ』は、どのような理由で、例えば、箴言の「ツァディーク」が「神に従う人」と訳されるようになったのかの説明（弁明）の場だと思いが、そのようになっていない。残念なことである。

72 並木浩一「六『文学書』について」，207。

73 ここでの議論では、ひとまずツェダカーを「救いの業」あるいは「恵みの業」等に訳すことの適切性は措いておくことにする。

74 正義は反対のものを想定することで、その意味範囲がより規定されるかも知れない。正義に対立するものとして、「不相応な個人的ひいき，殺人，傷害，窃盗，強奪，不正な起訴，名誉毀損，意地の悪い中傷，誹謗，詐欺，搾取」が考えられる。W・パンネンベルク（佐々木勝彦・濱崎雅孝訳）『なぜ人間に倫理が必要かー倫理学の根拠をめぐる哲学的・神学的考察ー』（教文館，2003），185参照。

考えられる。しかし、すでに引用した『新聖書大辞典』の、「義は旧約聖書において、もっとも重要な概念の一つであり、『聖』と並んで、またそれと結びついて神の本質を端的に示す言葉である」を待つまでもなく⁷⁵、聖書における「義」の意味は、倫理的に正しい行為を意味するだけではなく、神との正しい関係を意味する言語と理解されている。即ち、神と人との縦の関係を主軸として人と人との横の関係が規定されていくような神学的関係概念言語である。それ故に、倫理的行為の基準としての人間の義は神の義の反映であるときに神学的に有資格となる⁷⁶。しかし、正義は必ずしもそうではない、神学的であるというよりは、倫理的位相の強い語であるといえよう。

キリスト教において「義」という言葉は、神学的刻印のある言葉である。キリスト者は、「義」を信仰義認と結びつけ、個人的救済の地平で考える傾向をもつ。箴言において、ツエデク／ツエダカーは創造の世界、社会、そして共同体における秩序と平和の問題と関わっており、根源的には、神のツエデク／ツエダカーを反映しているとはいえ、共同体の信義という側面が強い。その辺が「神学的救済論の主導概念」⁷⁷としてキリスト教的刻印の強い「義」という言葉で表現できるのかどうか、問題ではある。

中沢洽樹氏によれば、「義」は要するに契約を中心とする人格的な関係概念であって神と人間双方のあり方を規定するものである⁷⁸。もしそうであれば、箴言では、言葉の上では神との契約が出て来ないので、ストレートにはいかない。そのため、箴言で、この「義」という訳語を用いる場合には「神

75 小泉達人「義」『新共同訳聖書辞典』（キリスト新聞社、1995.）、361

76 Cf. Henning Graf Reventlow, "Righteousness as Order of the World: Some Remarks toward a Programme," ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman, *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence* (Sheffield: JSOT Press, 1992), 83.

77 Kertelg, K.「δικαιοσύνη, 義, 正義, 正しさ」『ギリシア語新約聖書積義事典 I』（教文館、1993）、377. ただ新共同訳は外典と新約聖書の中では「義」という訳を差し控えてはいない。その点を考慮すると、これは間違った推測かも知れないが、単純にギリシア語のディカイオスネーは「義」と訳し、ツエデク／ツエダカーからはキリスト教の神学的刻印のある「義」の概念を取り除こうとしているようにも見える。

78 中沢洽樹『第二イザヤ研究』（山本書店、1964）、179-80.

学的救済論的の主導概念」ではない、という「但し書き」が必要となる⁷⁹。

さて、「義人」についてであるが、岩波訳が一貫して、そして新改訳では1箇所のみ（4：18）ではあるが、箴言のツァディークを「義人」と訳していることについてはすでに見た。新共同訳では、口語訳で新旧約聖書合わせて51回（旧約は20回）あった「義人」という言葉は消えてしまった。新共同訳では、口語訳で「義人」と訳された箇所の多くは「正しい人」（14回）と訳され、次に「善人」（4回）、「従う人々」（1回）、「神に従う人」（1回）となっている。興味深いのは、ハバクク書2章4節の訳とその引用である新約聖書のローマの信徒への手紙1章17節（ガラ3：11も同じ）の訳の差異である。

見よ、高慢な者を。彼の心は正しくありえない。しかし、神に従う人は信仰によって生きる。（ハバ2：4）

福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。「正しい者は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。（ローマ1：17）

ヘブライ語聖書の「神に従う人」（ツァディーク）は、新約聖書では、「正しい者」（ディカイオス）になっている。口語訳では両者は「義人」として統一されていた。もちろん統一しなくてもよいが、新共同訳があえて統一しなかった理由は何か。

先のツァディークのところでもとめたように、「ツァディークは行動する者である。信仰に基づいて完全（誠実・高潔）な道を歩み、正義／公平を行い、弱者（貧者）の訴えを聞き、悪を行う者を忌み嫌う者であり、共同体の

79 勝村弘也「箴言」、200-201では、ツェデク／ツェダカーが「義」と訳されているが、その場合の義が「神学的概念でも、狭義の法的概念でもなくて、共同体における人間の行動のあり方を指している」と但し書きをしている。「義」の訳語の意義に関しては、鈴木範久『聖書の日本語－翻訳の歴史－』（岩波書店、2006）、215-217参照。

人々から尊敬される人生を歩んでいる者である」と考えられるなら、箴言のツァディークを「義人」と訳すのは悪くはないのではないかと考える。さらに言えば、義人として名高いヨブに対する形容語、ターム（新「無垢な」、口「全く」）（ヨブ1：1）が、箴言には、ツァディークとの関連で何箇所か名詞形トームで出て来る（例えば、2：20-21, 10：6-10, 28-29, 11：5-9, 20：7）。そのようなことを考慮すれば、「義人」という訳は益々悪くない感じがしないでもない。しかし、ここでも「神学的救済論の主導概念」による信仰による「義人」が壁となる。従って、この場合も「但し書き」が必要となる。ただ「但し書き」なしの場合、ツァディークを、上記「8行為(4)」で触れたように、「義しい人」のような造語で訳すのも一案かも知れない。

結 語

まず、『聖書 新共同訳』の新共同訳の訳者・編集者をはじめとする関係者の永年にわたる犠牲的労苦に対して大きな敬意と感謝を表明したい。特に筆者にとって、箴言におけるツェダカー／ツァディークに対する動的等価訳に基づく大胆な訳語は新鮮であり、箴言におけるツェデク／ツェダカー／ツァディークの適訳とはどのようなものであるべきかを再考するありがたいきっかけとなった。その上でなおも次のことを記すべかと思う。

箴言においてツェデク／ツェダカー／ツァディークは、基本的語義に基づき統一的・共属的に理解されるべき言語であるが故に、その訳出にあたっては、そのことが最大限考慮されるべきである。新共同訳では部分的には、それらが見られるものの、全体的には、それが欠けていると思う。ツェデクの「正しいこと」、「正義」等の訳は評価できるが、ツェダカーの「慈善」、「(神)に従う」や、ツァディークの「神(主)に従う人」は大胆な試みであることは評価できるが、箴言の世界観・宗教観に必ずしも符合した訳とは言えず、口語訳に代わる適訳とはなっていないと考える。

参考文献〔(上), (下)〕

- Accordance Bible Software Scholar's Collection 4. Altamonte Springs, FL: OakTree Software, Inc., 2002.
- B・W・アンダーソン (中村健三訳) 『深き淵より—現代に語りかける詩編—』新教出版社, 1989.
- Brown, Francis, S. R. Driver and C. A. Briggs. *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament with an Appendix Containing the Biblical Aramaic*. Oxford: Clarendon Press, no date.
- Cover, Robin C. "SIN, SINNERS," in *The Anchor Bible Dictionary* VI. New York: Doubleday, 1999, 31-40.
- "Discussion," ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman. *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence*. Sheffield: JSOT Press, 1992.
- Falk, Ze'ev W. "Law and Ethics in the Hebrew Bible," ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman. *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence*. Sheffield: JSOT Press, 1992.
- 「義人」『新聖書大辞典』キリスト新聞社, 1984, 368.
- 反対語対照語辞典編纂委員会編 『活用自在反対語対照語辞典』柏書房, 1999.
- Ho, Ahuva. *Sedeq and Sedaqah in the Hebrew Bible*. New York: Peter Lang, 1991.
- Jepsen, A. "צַדִּיק וְצַדִּיקָה im Alten Testament," H. G. Reventlow (hrs.) *Gottes Wort und Gottes Land*. Goettingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965.
- 「慈善」『新共同訳聖書辞典』キリスト新聞社, 1995, 222-223.
- 勝村弘也「箴言」『新共同訳 旧約聖書注解Ⅱ—ヨブ記—エゼキエル書—』日本基督教団出版局, 1994.
- . 『詩編』日本基督教団出版局, 1992.
- Kertelg, K. 「δικαιοσύνη, 義, 正義, 正しさ」『ギリシア語新約聖書釈義事典Ⅰ』教文館, 1993, 375-381.
- Koehler, L. & W. Baumgartner. *Hebraeisches und Aramaeisches Lexikon zum Alten Testament Vol. III*. Leiden: E. J. Brill, 1990.
- 小泉達人「義」『新聖書大辞典』キリスト新聞社, 1984, 361-363.
- K. コッホ (荒井章三・木幡藤子訳) 『預言者Ⅰ』教文館, 1990.
- J・L・クレンショウ (中村健三訳) 『知恵の招き—旧約聖書知恵文学入門—』新教出版社, 1987.
- Levenson, Jon D. *Creation and the Persistence of Evil: The Jewish Drama of Divine Omnipotence*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press, 1988.
- Van Leeuwen, Raymond C. "The Book of Proverbs: Introduction, Commentary, and Reflections," in *The New Interpreter's Bible* V. Nashville: Abingdon Press, 1997, 17-264.
- McKane, William. *Proverbs: A New Approach*. The Old Testament Library; Philadelphia: The Westminster Press, 1977.

- Murphy, R. E. *Proverbs*. World Biblical Commentary 22; Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1998.
- . *The Tree of Life: An Exploration of Biblical Wisdom Literature*. New York: Doubleday, 1990.
- 中沢洽樹 『第二イザヤ研究』山本書店, 1964.
- 「特集『聖書 新共同訳』—旧約聖書」, 『日本の神学』30 (1991) 171-213.
- 並木浩一 「六『文学書』について」『日本の神学』30 (1991), 202-209.
- . 『「ヨブ記」論集成』教文館, 2003.
- W・パンネンベルク (佐々木勝彦・濱崎雅孝訳) 『なぜ人間に倫理が必要か—倫理学の根拠をめぐる哲学的・神学的考察—』教文館, 2003.
- Perdue, Leo G. “Cosmology and Order in the Wisdom Tradition,” ed. John G. Gammie and Leo G. Perdue. *The Sage in Israel and the Ancient Near East*. Winona Lake: Eisenbrauns, 1990.
- G. フォン・ラート (荒井章三訳) 『旧約聖書神学 I—イスラエルの歴史伝承の神学』日本基督教団出版局, 1980.
- . (勝村弘也訳) 『イスラエルの知恵』日本基督教団出版局, 1988.
- Reventlow, Henning Graf. “Righteousness as Order of the World: Some Remarks toward a Programme,” ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman. *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence*. Sheffield: JSOT Press, 1992.
- Rosenthal, Franz. “Sedaka, Charity,” *Hebrew Union College Annual* 23 No.1 (1950-51), 411-430.
- Schmid, H. H. *Gerechtigkeit als Weltordnung: Hintergrund und Geschichte des Alttestamentlichen Gerechtigkeitsbegriffes*. Tuebingen: J.C.B.Mohr, 1968.
- Scott, R. B. Y. *Proverbs · Ecclesiastes*. The Anchor Bible; Garden City, New York: Doubleday & Company, Inc., 1965.
- Scullion, J. J. “RIGHTEOUSNESS,” in *The Anchor Bible Dictionary V*. New York: Doubleday, 1999, 724-36.
- 『聖書教育』54 卷第 1 号 (2003.2).
- 関根清三 「四『預言書』について(1)イザヤ書, エレミヤ書—中沢洽樹『イザヤ書, 新訳と略註』と比較しつつ—」『日本の神学』30 (1991), 188-194.
- 『関根正雄 新訳 旧約聖書 第IV巻 諸書』教文館, 1995.
- 拙稿 「人はいつアダムになるのか—創世記 1~5 章の「アダム」の訳をめぐる」『西南学院大学神学論集』第 53 卷第 1 号 (1995.9), 1-24.
- . 「研究ノート—レアの目—」『西南学院大学神学論集』第 56 卷第 1 号 (1998.10), 71-80.
- . 「ラピス・ラズリ?—新共同訳の批判的検討—」同上第 59 卷第 1・2 合併号 (2002.3), 1-14.
- 「箴言」『新共同訳聖書辞典』キリスト新聞社, 1995, 255-256.
- 鈴木範久 『聖書の日本語—翻訳の歴史—』岩波書店, 2006.

- Toy, C. H. *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Proverbs*. Edinburgh: T. & T. Clark, 1988.
- Watson, Duane. "EVIL," in *The Anchor Bible Dictionary II*. New York: Doubleday, 1999, 678 - 79.
- Weinfeld, Moshe. "Justice and Righteousness' — משפט וצדקה —: The Expression and Its Meaning," ed. H. G. Reventlow and Yair Hoffman. *Justice and Righteousness: Biblical Themes and Their Influence*. Sheffield: JSOT Press, 1992.
- Westermann, Claus (tr. J. D. Charles). *Roots of Wisdom: The Oldest Proverbs of Israel and Other Peoples*. Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press, 1993.